

令和6年度第4回（第12期第6回）さいたま市社会教育委員会 会議録

開催日時：令和7年1月20日（月）14時00分～15時30分

開催場所：市役所別館2階 第7委員会室

出席者名：【委員】若原 幸範議長、石川 敬史副議長、井上 久雄委員、
今川 夏如委員、加藤 美幸委員、佐野 操委員、澁谷 知範委員、
関根 広美委員、藤田 成司委員、吉川 洋一委員、吉沢 浩之委員
【事務局】（生学習振興課）辰市 健太郎、玉城 伸、石田 悦子、
三村 悟、伊藤 智美、駒井 友里香

欠席者名：石崎 敬吾委員、小林 玲子委員、鶴ヶ谷 柊子委員、林 弘樹委員

公開・非公開の別：公開

傍聴人の数：なし

1 開 会

2 挨 拶

3 議 事

(1) 前回会議について

令和6年度第3回会議の概要について、会議録に基づき説明した。

(2) 第12期社会教育委員会 提言の作成について

ア 提言の骨子について

提言の骨子について事務局より説明を行い、資料2「提言における『働く』ことの意味について理解を深めるために」について議論を行った。

※「共」の領域とは、「私」と「公」の中間に位置づく、資源や課題を共有する場、生活・活動を共にする（協力・助け合い等の）場

【質疑応答・意見】

<澁谷委員>

「共」の領域について、私の理解が正しいか確認させていただきたい。行政のセクターや市場のセクター、私的領域のセクターがある一方で、NPOや市民団体、自治会のような公共的なアクターが活躍する市民セクターがある。「共」の領域とは、NPOなど地域づくりに関わるようなアクターが活躍する市民セクターを想像したがこの認識で合っているか。

<若原議長>

おっしゃるとおりである。NPO等の組織化された市民セクターが「共」の領域を作るときに非常に重要な担い手であると考えている。

<加藤委員>

「働く世代の」という部分を明確に定義すると、職業や仕事だけを想定してしまうため、広く考えていこうと議論をしてきた。提案していただいたように幅広く定義をすると、これまで私たちが考えてきた働く世代の生涯学習になると思った。

特に資料2の3、職場・家庭・地域というような場を考えても良いと思う。また、同資料の2には「狭義」と「広義」があるが、場や範囲があったとしても、そこから生涯学習を広く行うことで協議テーマにもある橋渡しに繋がるため、広く定義していただくと良いと考えた。

<若原議長>

おっしゃっていただいたように広く捉えたほうが良いと思うので、その方向で進めていきたい。

<石川副議長>

特に資料2の3は重要な概念であると思う。「共」の領域について何か政策や提言が出せないかというところは賛成である。

「働く」とことと生涯学習の関係をどのように考えるかというところでは、以前の会議で生涯学習が生き方そのものであるという意見があったと思う。

以前の会議のグループワークで「ウェルビーイング」についての話が出たが、豊かに生きることや人の幸福というような概念と働くことと生涯学習の関係が見えてくると良いと思った。

<若原議長>

「働く」ことと概念ということで、「働く」を切り口に書いてみたが資料2の1の表の結果に書いた「自分らしく生きる」や「共に生きる」がもう少し大きな上位概念、包括的な概念だと思うので、これを意識しながら書いていきたい。

<井上委員>

私は自治会の活動を行っているが、「働く世代の生涯学習と、地域活動への橋渡し」を協議テーマとして作成する提言の効果を非常に期待している。

<若原議長>

NPO等と並んで自治会も重要だと考えているので、意識していきたいと思う。

イ 提言の具体的な内容について

資料1「『働く世代の生涯学習と、地域活動の橋渡し』を実現していくための方策について」を基に事務局より説明を行い、提言の具体的な内容について議論を行った。

【質疑応答・意見】

<澁谷委員>

生涯学習を身近に感じるきっかけづくりに関して、働く世代の生涯学習をコーディネートする窓口や支援者が必要であるという記載はその通りであり、コーディネーターを育成するような生涯学習講座もあると素晴らしいと思う。先日、生涯学習総合センターで市民がシニア世代等の相談にのり、生涯学習サークルや公民館の活動を繋ぐ仕組みがあることを知った。このような市民自身がコーディネートする取組が働く世代向けにも展開されると良いと感じた。

地域づくりに関して、働く世代を「共」の領域に繋げるために、市民活動サポートセンターや生涯学習総合センターがより機能的に連携すると良い。連携をすることにより、「働く世代の生涯学習と、地域活動への橋渡し」の取組がより訴求力のあるものになると思う。生涯学習が趣味や教養に関わる活動にとどまらず、まちづくりに関わる実践的な活動に直結するようなプログラムとして提供できると良いと思う。

また、発達障害を持つ方や外国にルーツを持つ方をはじめ、特別な配慮を要する方を支援するプログラムが必要である。国の指針にもある通り、社会的包摂を実現する形で社会教育や生涯学習のプログラムを提供できることが重要であると思う。

<若原議長>

いずれも非常に重要なポイントであると思う。

コーディネート機能について、プロとしてコーディネートの役割を担うのは公民館の職員や社会教育主事の方であるが、市民自身がコーディネーターの役割を担い、市民を養成していく仕組みが必要であるという考えは重要である。

市民活動サポートセンターや生涯学習総合センター・公民館の連携について、縦割りにせず、繋いでいくことが各施設や各機関で重要であるということはあまり議論されていなかったポイントであるので、提言に盛り込んでいきたい。

配慮が必要な人についても同様に考えている。

<今川委員>

いろいろなお話を聞き、非常に分かりやすくまとめられていて、今まで考えていたこととは違う切り口で物事を見ているのだと感じた。

最近では子育て休暇を取ることが推奨されたり、理解が広がったりして子育ての地位が向上してきた印象がある。一方で、ボランティア活動や地域活動は仕事をリタイアされた世代がやっているような印象が強く、働く世代は仕事が忙しいので参加できていない。ボランティア休暇や地域社会での活動をする際に有給が使えるようにするなど、生涯学習や社会教育の社会的な地位を向上させていかないと働く世代が活動に参加していくことは厳しい。「ウェルビーイング」等の言葉が生まれてきているが、社会的なフォローアップがない状態であるので、そこに踏み込んでいけたら良いと思う。

<若原議長>

資料2に整理したように「働く」範囲を狭義ではなく広義に捉えていこうとする時に、仕事の部分が主となり、他の部分が軽視されがちであるということはその通りであると思う。例に挙げていただいた子育てはだんだん地位が上がってきていると思うがそれも十分ではないし、地域活動やボランティアは低い位置に置かれているということもその通りである。これをどのように引き上げていくかということは政治的課題であるかもしれないが、生涯学習やリカレント教育が重要であり、その価値をもう少し高めて欲しいということを提言書に盛り込むことは必要だと考えている。

<佐野委員>

現在、平日に行っている子育てサロンには育休を取って参加されているお母さんたちが多いが、短い期間で参加をやめてしまう方が非常に多い。以前の会議で話した高齢者の方々が趣味で行っている活動も平日が多い。しかし、働く世代が平日の活動に参加することは厳しい。例えば、さいたま市の親の学習では、土曜日にプログラムを行うことでお父さんの参加が増えた。開催を土日や祝日の働く世代が参加しやすい時間にすることで参加する層が増えてくると感じている。

地域の行事は土日祝日の開催が多く、公の事業は平日の開催が多いためなかなか繋がっていないと感じるので、その仕組みづくりから考えていくと良いと思う。

<若原議長>

参加しやすい条件面の整備と環境面の整備についても大事だということはおっしゃっておりである。資料でも朝活やオンラインの活用等が盛り込まれているので、それらも組み込みながら、参加条件を整えていくことが必要である。

<加藤委員>

2つの協議課題について4つのキーワードで同じように整理しようと苦労されたのだな

と感じた。

キーワード①「人と人とを結びつけるつながり」は人と人とが結びつくというように主体的に書いた方が良くのではないかと。協議課題1・2のどちらか書きやすいほうに重きを置いて書くという方法もあると思う。

キーワード②「地域活動に繋がる場」は協議課題2では書きやすいと思うが、協議課題1で「地域活動に繋がる」と書くと、協議課題2の中身になってしまう。「繋がる場」というキーワードは大切だと思うので、協議課題1で書くのであれば「生涯学習に繋がる場」として整理するとはっきりするのではないかと。

キーワード③「継続の重要性」は協議課題1であれば、自身の生涯学習を辞めずに続けることが大事であるとし、協議課題2では地域活動を続け、繋げていくことがまちづくりになると書くと良いのではないかと。

キーワード④「学習者としての生涯学習」は協議課題1の方が書きやすいと思う。

<若原議長>

具体的にどのように整理するかをご提案いただいてありがたい。協議課題1・2で分かれてはいるが、両者とも密接に関わっている。

学習者を主体に置くのかということ、それを支援する社会教育の行政等を主体に置くのかということも整理が必要だと思うので意見を参考にして整理をしたいと思う。

<石川副議長>

今回のまとめ資料を見ていて、コーディネーターや媒介者等の人の存在が非常に重要であると感じた。行政が図書館司書や学芸員等の社会教育行政における専門職の配置をすることが議論の上で重要であると思う。人をどのように配置し繋げていくかがポイントで、図書館は図書館、博物館は博物館とするのではなく、横断的に繋いでいく仕組みが求められる。

働く世代が生涯学習を考える時に、今を考えるのか、10年後を考えるのかという見方もあると思う。今回は働く世代を対象としていて、非常に長い時間軸の方が対象となっているが、その人の人生や生き方、ライフプランというものを視野に入れても良いのではないかと。まとめるとなると難しいが、今と同時にもう少し先の生き方や将来展望も見ながら何かを学ぶという視点もあったら良いと感じた。

<若原議長>

職員の配置に関わることは大変重要で、教育委員会に対する提言書となるので、この内容を盛り込んで主張していきたいと思う。

時間軸も確かに重要である。ワークショップで議論したチャレンジスクールやみんなの夢の音楽隊は子どもを対象として、将来を担う世代に対して関わりを持つ取組であり、バブラボでは高齢世代を対象とし、働く世代からすると自分の将来像となるようなところと繋

がりを持つ取組が行われている。働く世代に軸を置きながら、次の世代や自身の将来像との関わりも意識してまとめてみたいと思う。

<吉川委員>

私はスポーツ協会の副会長という立場で会議に参加しているが、スポーツもやはり生涯学習の一環であると感じている。スポーツ協会には、運動の経験はないが何か運動ができる場がないかと探す方や今までのスポーツ経験を生かして活動できる場はないかと探す方などからの相談がある。スポーツを通じて人と交流したり地域に貢献したりしたいという人や健康を取り戻したいという人、様々な理由でスポーツを長く続けたいという方が非常に多くいる。市役所やスポーツ協会を通じて活動の場を探すことができる人もいるが、何をすれば良いのか分からないという人も地域にたくさんおり、そのような人々をどのようにスポーツに繋げていくかということをスポーツ協会の一つのテーマとして活動している。しかし、スポーツ協会だけでなくさまざまに地域を交えて活動していかないとなかなか繋がらないということを最近実感している。各競技団体が公民館にスポーツ教室のチラシを置くなどの取組みをしているが、現状ではまだまだ地域との繋がりが少ない。人と繋がることや、地域と繋がるのが大事であるとスポーツを通じて感じている。

<若原議長>

スポーツや文化活動は趣味というだけでなく、人が繋がるきっかけにもなる。指導者や審判として携わることは次の世代に繋ぐという話にも繋がると思う。スポーツ協会だけでは繋がりにくい側面があるという話は、市民活動と生涯学習を繋ぐことが難しいという話と同様の課題があるのではないかと感じた。行政と行政の横の繋がりや行政側と学習を支援する側のネットワークが必要となるということは不足していた論点であるため参考にしたい。

<藤田委員>

小学校の立場で感じていることをお話しすると、最近は授業参観に参加する父親が非常に増えている。先ほど、社会の制度についてのお話があったが、そのような努力により変化があったのだろうと感じている。また、授業ではコロナ禍の時から1人に1台ずつ端末が導入され、授業の形態が変わったとも感じている。保護者の方々がSNSで情報を共有し合ったり、教育活動の中にも人工知能が入ってきたりなどの変化もあり、生涯学習においてもそのような変化が生じていくと思う。そのような変化がある一方で、ネット社会の怖さを小学校の現場では感じている。

また、配慮が必要な人についての話が先ほどあったが、小学校でも特別な配慮や支援が必要な子どもたちが増えている。行政も支援を一生懸命に行ってはいるものの、追いつかない部分もあることが現状だろう。

学校現場では、多様な価値観が生まれており、生涯学習においても同様に多様な考えの広がりがあると思うがそれに対応していくことはなかなか難しいのだろうと思う。対応していくためには、興味のある人々が自ら考えて行動し、自走していくことができるような仕組みを作ることが重要であると感じる。

<若原議長>

働く場の状況や世代のあり方が変化していく中で、どのように対応していくかということを考えたい。

<関根委員>

キーワード④の学習者としてのという部分で、学ぶ側から教える側へという学びの循環は時間軸に相当すると思う。若い頃に学び、地域で活動していた方が、経験を増やし、活動を主催したり、アドバイスをしたりする側になることができる。この循環やスキルアップをすることができ、楽しくなるような学びの場の仕組みづくりがあると良いと思う。

「循環」は重要なキーワードになると思う。先ほどのお話でもあった市民側にも生涯学習を支援するコーディネーターを育てることによって循環をしていく。「楽しさ」や「ワクワク感」ということも大事にしていきたい。

ウ 本日のまとめ

<石川副議長>

学びや学び合うこと、学び続けることの拡張性とは何か、その意味は一体何かと考えた。受け身から主体的に自ら何かやり遂げることに広がったり、あるいは「拡張」を外に出かけていくという意味で捉えると、家に閉じこもるのではなく外に出かけていく、人と人が繋がり広がったりするということもあると思う。

大人である働く世代が学んだり、学び合ったりしている姿は子どもたちにも大きな影響を与えと思った。大人たちが学び合っていると、子どもたちも一緒になって学んでいく。このような学び合いの拡張性のようなものがとても大切である。私自身、図書館の領域で子どもの読書の推進計画などを作る際に、子どもの読書だけを議論するのではなく、大人も読まない子どもたちも読まないという話をしている。大人が学んだり、興味・関心のあることを調べたり、繋がったりすることによって子どもたちも楽しく学んだり、繋がったりする。このような世代を超えた学び、学び合いの広がりが非常に大切だと感じた。

<若原議長>

今回のテーマは働く世代の生涯学習ということで、非常に挑戦的なテーマだと思う。大学の授業で学生に社会教育について教えているが、公民館との関わりを学生に聞くと、小学生ぐらいまではよく利用していたが、中学で部活が始まると行かなくなり、大学生の時や就職した後に利用するイメージが湧かないという意見があった。本来は学校を出た後の学びの場として公民館や社会教育があるはずだが、イメージされないということが社会教育の1つの永遠の課題だと考えている。今回、この課題にチャレンジするというテーマで非常に難しかったと思うが、皆さんから多くの意見をいただき、方向性が少し見えてきたので意見を参考にまとめていきたい。

4 閉会